九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Will in If-Clauses and Actuality (In Honour of Professor Kenji Noguchi and Professor Osamu Osaka On the Occasion of Their Retirement)

Matsumura Yoshiko
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/1355852

出版情報：英語英文学論叢. 45, pp.83-90, 1995-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

条件節中の will と現実味

松　村　瑞　子

1．序

条件節中の時制については,「条件を表わす副詞節中では未来を指す場合にも現在形が用いられる。will が用いられるのは未来ではなく意志を表わす場合のみである」という規則が学校文法その他の文法書に記述されている。しかし，実際には無意志の will が条件節中にあらわれることが広く知られており，数々の議論が行なわれてきた。これらの議論には，will を伴った条件節が統語的に主節より独立したものが多いことへの説明に終始したものが多い(Allen 1966, Haegeman & Wekker 1984, Fujimoto 1985 参照)。Declerck (1984/1991)は様々な用例を集め議論をしているが，彼の議論では，いつ will を用いるべきか，いつ単純現在を用いるべきかがはっきりしない。Haegeman and Wekker(1984)はこれらの相違について統語的形式化を試みているが，その意味・語用論的相違については今後の研究が待たれるとしている。この論文では，特にこの意味・語用論的相違を中心に議論をすすめていく。

2．問題点

条件節中に will が用いられた場合の意味的特徴としては，描かれる出来事の実現性が高くなるという点が特に興味をひく。Haegeman(1983：160)は，will が条件節で用いられるのは「実現性」，即ち「未来の出来事が起こるだろうという話者の主観的確信」を表現するためであるとした。また，Wekker (1976：71)も，Close(1975：256)の用例(1)(2)を引用しながら，以下のような説明をした。

(1)　If the lava (from the volcano) comes down as far as this, it will be too late to evacuate these houses.
（もし（火山からの）溶岩がここまで流れてくれば，これらの家の人々を避難させても遅すぎるだろう。）

(2)　If the lava will come down as far as this, we must evacuate

these houses immediately.
(溶岩がここまで流れてきそうなら，即座にこれらの家の人々を避難させなくてはならない。)

即ち，will を伴う(2)では「(条件節中に描かれる) 未来の出来事が起こる見込みが非常に高い，あるいは避けられないと見なされているという点で，それは有標の未来である。また，溶岩がここまで流れてくるだろうという以前の予測の繰り返しのこともある」と述べた。

この条件節中の will に関する記述は，独立文中の will の用法からは予測できない。というのは独立文においては，次の(3)(4)に例示されるように，単純現在形を用いて描かれる未来と will を用いて描かれる未来の実現性を比較すると単純形の方が遙かに実現性・確実性の高い未来を表わすからである。[1)]

(3) The train leaves tonight from Chicago.
(4) He will leave tomorrow.

では，なぜ条件節では，独立文とは逆に，will を用いた未来の方が単純現在形を用いた未来よりも実現性が高くなるのであろうか。次節では，この問題を中心に will を用いた条件節と単純現在形を用いた条件節の相違について論じていく。

3．条件節と will

条件節中の will は，所謂判断的法助動詞(= epistemic modal) としての will ではない，純粋に未来を指示する will として取り扱われることが多い。しかし，条件節中には will が用いられにくい点，また用いられた場合には実現性が高くなる点は，will を単なる未来のマーカーではなく判断的法助動詞と考えるとうまく説明できる。

---

1) 実際、大学での英文法の時間に will のある条件節(i)と単純形の条件節(ii)の相違は何かと尋ねると、ほとんどの学生が独立文からの類推で will のある方が不確実な未来を表わし、単純形の方が確実な未来を表わすという誤った予測をする。
(i) If you will be alone on Christmas Day, let us know now.
(ii) If you are alone on Christmas Day, come round here any time you like (on that day).

単純現在形の条件節と will を伴う条件節の根本的違いは，前者は話者の**思考の世界**での真偽が問題とされているのに対し，後者は**現実世界**での実現性が問題とされているという点である。(1)では現実の世界でどうなるかは別として，単に話者の頭の中の世界で真になると前提して話を進めている。一方，(2)では現実世界で実際に実現する見込みについて論じているため，それだけ現実味のある仮定となってくる。

(1) If the lava (from the volcano) comes down as far as this, it will be too late to evacuate these houses.
（もし（火山からの）溶岩がここまで流れてくれば，これらの家の人々を避難させても遅すぎるだろう。）

(2) If the lava will come down as far as this, we must evacuate these houses immediately.
（溶岩がここまで流れてきそうなら，即座にこれらの家の人々を避難させなくてはならない。）

条件文は現実の見込みは考慮から外した純粋の仮定として提示されることが普通であるため，単純現在形を用いて純粋に思考の世界での仮定であるとした(1)の型の条件文が通常は用いられる。[2] これが古い英語では仮定法現在形で表現されていたことも，純粋に思考の世界での仮定として提示されていることを支持してくれる。一方，will を伴った(2)の型の条件文は，仮定を現実の世界に限定する有標の形式であるため頻度は低い。しかし，用いられた場合には現実世界についての仮定であるためかなりの現実味がでてくる。このことは，will が判断的法助動詞であり，話者の判断の基盤となった現実世界における証拠の存在を示唆するためであると考えられる。[3]

2）単純現在形を用いた条件節は思考の世界での仮定を表わすが、だからといって現実の世界での実現性が低くなくてはならないというものでもない。単に、現実世界の実現性については無標の表現であるというだけである。それ故、単純現在形を用いた条件節の出来事の現実における実現性は描かれる内容によってかなり広い範囲のものとなる。
（条件節の表わす意味内容が広範囲に及ぶことについては樋口(1987)参照のこと。）
（i）Lizards are pleased if the sun shines.（一般的事実）
（ii）If he proposes to me, I'll marry him.（実現性未定）

3）条件節中の will を法助動詞とする別の説明については大橋(1987)を参照のこと。

次の例についても同様の説明があてはまる。(5a)はロンドンにある慈善施設の戸にクリスマスの2週間前に実際に貼りだされたものだそうである(Close 1980参照)。Declerck(1991：205) は(a)文と(b)型の文の相違について，(a)は聞き手（ここでは貼り紙を読んだ孤独な人）には自分がクリスマスに現実に一人ぼっちになりそうだということがわかっている仮定である一方，(b)型の文では話し手にも聞き手にもそれはわからない（開放条件）としている。

(5a) If you will be alone on Christmas Day, let us know now. (Close 1980：104)
(6a) If you're alone on Christmas Day, come round here any time you like (on that day). (同上：109)
(5b) クリスマスに一人になりそうなら，今すぐ知らせてください。
(6b) クリスマスに一人になったら，好きな時にここに来てください。

また，日本語の条件節においても同様に，話者の判断を表わす助動詞を入れると現実味がでてくる。～ソウダを加えた日本語の条件文(5b)も will が用いられている英語と同様，実際一人になりそうかどうかという現実味がでてくるのに対し，単純形を用いた(6b)ではクリスマスになるまで未定のことという印象を与える。

4．現実世界に限定された条件節

この will を伴う条件節は現実世界での条件に限定されていることは具体例をみるとよくわかる。Close(1980：103)は大量の油が北海に流出するという事故の後，油膜の流れる方向に関してのテレビ討論が行われた際に，ノルウェイの大臣が言った次のような言葉を引用する。

(7) If the slick will come as far as Stavanger, then of course I must take precautions on a massive scale.
（もし油膜がスタバンガーまで流れてきそうなら，もちろん大規模な予防措置をとっておかなくてはならない。）

この状況では will を伴った形のみが可能であり，単純現在形を用いると不

合理で無責任な発言になってしまうという。この討論は現実にどうなりそうかを予測して取るべき策を練るものあり，油膜がスタバンガーまできたと仮定して，その予防策を講じても何の意味もないからである。

また，Declerck(1984：285)は，(8)の用例を用いて，will を伴う条件文の中には will を be going to に交替させた方がその内容がうまく伝わることがあると述べているが，これもここでの議論から容易に推測できる。

(8) If the decision will/is going to be taken tomorrow, we will read all about it in tomorrow's evening papers.

一般に be going to は「現在の未来成就」(Leech 1971：54-57)，即ち現在現実にその原因や意志があり，それが未来に成就するであろうことを表わす形態である。そのため，現実世界に限定した仮定を表わす条件文にはうってつけであり，容易に will と交換されると言える。

また，Wekker(1976)その他に指摘されるように，will を伴う条件節はその前になされた予測の繰り返しのことが多いことも説明づけられる。

(9) A：Who will be given the job?
B：I think it will be George.
A：George? But... Tell me, if it will be George, how come I have not seen his application?

既に現実にどうなりそうであるかについてのBの予測があった後の仮定であるので，その予測の時点で既に現実の世界に仮定は限定されており will を伴った条件文が用いられるのだと言える。

さらに，Jespersen(1931)が will を用いた用例の方が丁寧と述べた次のような用例についてもうまく説明できる。

(10) I will come if it will be any use to you.

Declerck(1984：291)は，この用例は“Tell me that it will help you if I come, and I will come”と言い換えることができ，「話し手は聞き手（または他の人）にp（前件）が起こることを確認するよう求めており，この確

認によってq（後件）を行なおうという自分の決心（意図，約束）を実行しようとしている」と述べる。この種の用例についても，will を用いることで，聞き手にとって利益となる条件節の事象が現実に実現することを話し手が確信していることが表現され，そこから丁寧さが出されているのだと言える。

同様に，以下のように主節から比較的独立していると言われる条件節についても will を用いることの効果が説明できる。

(11) I'll come down to your office after one o'clock, if it will suit you. (Poutsuma 1926：190)

(12) Hang it all! If that idiot won't be there as well!
Who the hell sent him an invitation? (Declerck 1984：299)

用例(11)では「あなたの都合のよい時間であること」が，(12)では「彼がそこにいない」ことが現実に起こることを望む気持ちを表現するために will が用いられていると考えることができる。

5．結語

条件文中の will については様々の議論が行なわれてきた。しかし意味・語用的には最も興味を引く「実現性・現実味」との関わりについては，その事実は指摘されてきたにも拘らずあまり議論はすすめられなかった。何故条件節で通常は現在形が用いられるのか，何故 will は起こりにくいのか，また will を用いるのはどういう場合かを考えると判断的助動詞としての will の意味が関わっているとするのが自然であると思える。

参考文献

Close, R.A. 1980. "*Will* in *If*-Clauses." *Studies in English Linguistics.* S. Greenbaum et al. (eds.) Longman.

Declerck, R. 1984. "'Pure Future' *Will* in *If*-Clauses." *Lingua* 63, 279-312.

——.1991. *Tense in English. Its Structure and Use in Discourse.* Routledge.

Fauconnier, G. 1984. *Espaces Mentaux. Editions de Minuit.* [坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博訳 1987.『メンタル・スペース』 白水社]

Fujimoto, Shigeyuki. 1985. "'Pure Future' *Will* in *If*-clauses."『言語文化論集』第19号：173-183.

Haegeman, L. 1983. *The Semantics of Will in present-day British English: A Unified Account.* Brepols.

——. & Wekker, L. 1984. "Pragmatic Conditionals in English." *Folia Linguistica* 18 : 485-501.

Jenkins, L. 1972. *Modality and English Syntax.* MIT. Ph.D. Dissertation.

Jespersen, O. 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part* 4. Allen & Unwin.

Leech, G. 1971. *Meaning and the English Verb.* Longman.

Poutsuma, H. 1926. *A Grammar of Late Modern English. Part II.* Noordhoff.

Wekker, H. 1976. *The Expression of Future Time in Contemporary British English.* North-Holland.

樋口万里子. 1987.「If 節の命題と意味機能」『活水論文集』第30集：171-201.

大橋 浩. 1987.「If 節中の will 再考」『九州英文学研究』第 4 号：23-35.